

## 2008年前期－2010年前期のG-TELP結果についての報告

教育センター外国語教育推進部  
外国語教育推進部長 富岡龍明

教育センターでは2008年度から英語の共通実力テストG-TELP（国際英検）レベル3を導入し、全学の1年生に受験を義務付けている。2010年度からは1年生だけでなく、2年生前期の英語オープン受講生にも受験を義務付けて制度を拡充した。このテストは英語を母語としない学習者の英語によるコミュニケーション能力を測るための客観式の試験で、本学で採用しているレベル3は英検2級～準2級、TOEIC600～400程度にあたる。前期と後期の10週～11週目あたりで各1回、計2回実施している。

本報告は2008年前期から2010年前期まで通算5期にわたるG-TELP結果について述べたものである。報告の論点は以下のようにまとめることができる：

- 1) 全学的に前期から後期にかけて得点の伸びが見られる傾向がある。
- 2) ここ3年間について見る限り、全学的観点からは入学生の英語学力レベルは毎年ほぼ同一である。
- 3) 学部別で見た場合、入学生のレベルが過去3年間について毎年ほぼ同一の学部と年度によって低下した学部の落差が見られる。
- 4) 週2回授業のコア英語受講生も週1回授業の英語オープン受講生もともに有意差のある学力の伸びを示している。

以上の4点について、以下に詳述する。

注) 用語解説：以下の報告書に現れるG-TELP関係の略語について

GRM = Grammar (文法)

LST = Listening (聴解)

RDG = Reading (読解)

TTL = Total (合計)

## 1. 2008年前期から2010年前期まで5期のG-TELPの得点推移

表1

	セクション	前期(08年7月)	後期(08年12月)	得点差	セクション	前期(09年6月)	後期(09年12月)	得点差		セクション	前期(10年6月)
全学	GRM	60.3	67.9	7.5	GRM	61.5	68.5	7.0	全学	GRM	60.6
	LST	41.0	47.9	6.9	LST	42.2	47.4	5.2		LST	42.0
	RDG	56.0	54.9	-1.1	RDG	57.7	55.7	-2.0		RDG	57.7
	TTL	157.4	170.7	13.3	TTL	161.4	171.6	10.2		TTL	160.2
医学部 医学科	GRM	81.6	87.9	6.3	GRM	82.5	89.6	7.1	医学部 医学科	GRM	80.3
	LST	49.2	60.7	11.5	LST	54.1	58.9	4.7		LST	52.5
	RDG	78.3	77.7	-0.5	RDG	80.3	79.7	-0.6		RDG	81.0
	TTL	209.1	226.4	17.2	TTL	216.9	228.2	11.3		TTL	213.8
医学部 保健学科	GRM	63.4	72.7	9.3	GRM	62.3	74.3	12.0	医学部 保健学科	GRM	63.7
	LST	40.9	48.0	7.1	LST	40.5	48.3	7.8		LST	40.5
	RDG	56.7	56.7	-0.0	RDG	58.6	58.7	0.1		RDG	58.3
	TTL	161.1	177.4	16.4	TTL	161.5	181.4	19.9		TTL	162.5

教育学部	GRM	57.8	66.1	8.3	GRM	58.9	66.5	7.7	教育学部	GRM	57.7
	LST	40.3	46.7	6.4	LST	41.2	46.0	4.7		LST	39.6
	RDG	52.9	52.5	-0.4	RDG	54.6	53.7	-1.0		RDG	54.1
	TTL	151.0	165.4	14.3	TTL	154.7	166.1	11.4		TTL	151.4
工学部	GRM	55.8	62.1	6.3	GRM	57.8	63.7	5.9	工学部	GRM	54.7
	LST	39.8	45.2	5.4	LST	39.9	43.9	3.9		LST	40.1
	RDG	51.4	49.2	-2.2	RDG	51.7	51.5	-0.3		RDG	51.1
	TTL	147.0	156.6	9.5	TTL	149.5	159	9.6		TTL	145.9
歯学部	GRM	75.2	89.4	14.2	GRM	76.5	82.7	6.2	歯学部	GRM	66.6
	LST	47.6	54.6	7.1	LST	46.7	54.9	8.2		LST	48.9
	RDG	76.3	71.9	-4.4	RDG	74.2	69.6	-4.6		RDG	68.6
	TTL	199.0	215.9	16.9	TTL	197.5	207.3	9.8		TTL	184.1
水産学部	GRM	54.8	65.0	10.1	GRM	52.2	61.3	9.1	水産学部	GRM	54.5
	LST	38.1	45.1	6.9	LST	39.3	45.0	5.8		LST	40.0
	RDG	49.2	49.9	0.7	RDG	47.1	48.8	1.6		RDG	50.6
	TTL	142.2	160.0	17.8	TTL	138.6	155.1	16.5		TTL	145.1
農学部	GRM	61.7	69.7	8.0	GRM	62.6	69.4	6.8	農学部	GRM	62.6
	LST	41.5	50.2	8.7	LST	41.7	48.7	7.0		LST	43.3
	RDG	57.7	56.5	-1.2	RDG	57.5	55.5	-2.0		RDG	59.2
	TTL	160.8	176.4	15.5	TTL	161.8	173.5	11.8		TTL	165.1
法文学部	GRM	65.9	72.9	7.0	GRM	66.2	74.1	7.9	法文学部	GRM	65.1
	LST	42.7	50.5	7.8	LST	43.9	51.2	7.2		LST	43.1
	RDG	62.9	61.5	-1.4	RDG	64.2	61.5	-2.7		RDG	63.6
	TTL	171.5	184.9	13.4	TTL	174.3	186.8	12.5		TTL	171.8
理学部	GRM	58.1	63.8	5.7	GRM	55.1	64.9	9.9	理学部	GRM	56.8
	LST	40.4	45.8	5.4	LST	42.0	45.8	3.8		LST	41.0
	RDG	52.8	51.7	-1.1	RDG	54.7	52.3	-2.3		RDG	53.6
	TTL	151.3	161.2	9.9	TTL	151.7	163.1	11.4		TTL	151.4

上の表1を見ると、2008年の前期から後期にかけて全学平均で13.3ポイントの伸びが見られ、2009年前期から後期にかけて10.2ポイントの伸びが見られる。使用している試験はG-TELP level 3であり、前期は2008年、2009年ともにForm313、後期は2008年、2009年ともにForm315である。即ち前期、後期それぞれで同一の試験内容である。これによると、2008年と2009年に関しては1年生の英語力は、1年生の期間に関していえば伸長が見られたということになる。2010年度は前期を終わった段階で後期については現段階では確定的なことは言えない状況である。

## 2. 2008年から2009年の学部別前期・後期の得点推移

表2

■ 2008年度

※得点差の大きい順。

	前 期				後 期				得点差 (後期 - 前期)			
	GRM	LST	RDG	TTL	GRM	LST	RDG	TTL	GRM	LST	RDG	TTL
医学部	68.8	43.8	64.2	176.8	78.2	52.7	64.2	195.1	9.4	8.9	0.0	18.2
水産学部	54.8	38.1	49.2	142.2	65.0	45.1	49.9	160.0	10.1	6.9	0.7	17.8
歯学部	75.2	47.6	76.3	199.0	89.4	54.6	71.9	215.9	14.2	7.1	-4.4	16.9
農学部	61.7	41.5	57.7	160.8	69.7	50.2	56.5	176.4	8.0	8.7	-1.2	15.5
教育学部	57.8	40.3	52.9	151.0	66.1	46.7	52.5	165.4	8.3	6.4	-0.4	14.3
法文学部	65.9	42.7	62.9	171.5	72.9	50.5	61.5	184.9	7.0	7.8	-1.4	13.4
全学	60.3	41.0	56.0	157.4	67.9	47.9	54.9	170.7	7.5	6.9	-1.1	13.3
理学部	58.1	40.4	52.8	151.3	63.8	45.8	51.7	161.2	5.7	5.4	-1.1	9.9
工学部	55.8	39.8	51.4	147.0	62.1	45.2	49.2	156.6	6.3	5.4	-2.2	9.5

## ■ 2009年度

※得点差の大きい順。

	前 期				後 期				得点差 (後期-前期)			
	GRM	LST	RDG	TTL	GRM	LST	RDG	TTL	GRM	LST	RDG	TTL
水産学部	52.2	39.3	47.1	138.6	61.3	45.0	48.8	155.1	9.1	5.8	1.6	16.5
医学部	70.6	46.1	67.5	184.1	80.4	52.8	67.0	200.2	9.8	6.7	-0.4	16.1
法文学部	66.2	43.9	64.2	174.3	74.1	51.2	61.5	186.8	7.9	7.2	-2.7	12.5
農学部	62.6	41.7	57.5	161.8	69.4	48.7	55.5	173.5	6.8	7	-2.0	11.8
教育学部	58.9	41.2	54.6	154.7	66.5	46.0	53.7	166.1	7.7	4.7	-1.0	11.4
理学部	55.1	42.0	54.7	151.7	64.9	45.8	52.3	163.1	9.9	3.8	-2.3	11.4
全学	61.5	42.2	57.7	161.4	68.5	47.4	55.7	171.6	7.0	5.2	-2.0	10.2
歯学部	76.5	46.7	74.2	197.5	82.7	54.9	69.6	207.3	6.2	8.2	-4.6	9.8
工学部	57.8	39.9	51.7	149.5	63.7	43.9	51.5	159.0	5.9	3.9	-0.3	9.6

上の表2を見ると、2008年度は前期から後期にかけて全学平均で13.3ポイントの伸びが見られた。学部別では、医学部次いで水産学部が最も大きな伸びを示し、全学平均を大きく上回っている。逆に理学部と工学部は全学平均を下回っている。

2009年度については、前期から後期にかけて全学平均で10.2ポイントの伸びが見られた。学部別では、水産学部次いで医学部が最も大きな伸びを示し、全学平均を大きく上回っている。逆に歯学部と工学部は全学平均を下回っている。

## 3. 2008-2010年度の3カ年の前期成績比較 — 入学生のレベルはほぼ同一

表3

学部	2008年前期				2009年前期				2010年前期			
	GRM	LST	RDG	TTL	GRM	LST	RDG	TTL	GRM	LST	RDG	TTL
医学部 医	81.0	50.9	80.0	211.8	82.5	54.1	80.3	216.9	80.3	52.5	81.0	213.8
医学部 保健	62.9	40.6	55.7	159.2	62.3	40.5	58.6	161.5	63.7	40.5	58.3	162.5
医学部 全体	70.1	44.6	65.3	180.0	70.6	46.1	67.5	184.1	71.1	45.9	68.5	185.5
水産学部	54.4	38.3	48.8	141.5	52.5	39.3	47.3	139.1	54.5	40.0	50.6	145.1
歯学部	79.8	48.8	76.4	205.1	76.5	46.7	74.2	197.5	66.6	48.9	68.6	184.1
農学部	61.9	41.9	58.4	162.2	62.6	41.7	57.5	161.8	62.6	43.3	59.2	165.1
教育学部	58.1	40.6	53.1	151.7	58.9	41.2	54.6	154.8	57.7	39.6	54.1	151.4
法学部	66.3	43.4	63.2	172.9	65.9	43.9	64.1	174.0	65.1	43.1	63.6	171.8
理学部	58.3	40.3	53.1	151.7	55.1	41.9	54.6	151.7	56.8	41.0	53.6	151.4
工学部	55.6	39.8	51.5	146.9	57.7	39.9	51.7	149.3	54.7	40.1	51.1	145.9
全体	61.2	41.6	57.0	159.8	61.5	42.2	57.7	161.4	60.6	42.0	57.7	160.2

表3が示すところでは、全体では2008年度前期159.8、2009年度前期161.4、2010年度前期160.2で、次の4で詳細に見ることになるが、ほぼ同一の得点結果であり、統計的な有意差は見られない。

G-TELPは2008年度から、前期10～11週目、後期10～11週目をめどにして年2回実施する体制をとっている。前期実施が6月末頃であるので、4月の入学時点での学力検査にはなっていないが、ほぼそれに準じる形での、学生の英語力診断の役割を果たしているといえる。しかも2008年度～2010年度まで、前期G-TELP試験で使用したのはG-TELPレベル3のForm313という同一内容試験であるので、そこで出てきた成績データは年度同士の単純比較が可能であり、センター試験のように年度ごとの難易度差を考慮して比較する必要がないものである。

#### 4. 3カ年の前期成績の分散分析結果

表 4

##### 分散分析結果

●帰無仮説 「2008年前期、2009年前期、2010年前期の3回のテストの平均点には差がない」

●検証基準

- ① P値 < 棄却域の確率 (0.05) : 棄却
- ② F境界値 < 観測された分散値 : 棄却

○TTL

概要

グループ	標本数	合計	平均	分散
2008	2007	320637	159.7593423	1094.229692
2009	2003	323310	161.4128807	1093.51426
2010	1980	317221	160.2126263	1110.945672

分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P - 値	F 境界値
グループ間	2925.103142	2	1462.551571	1.330177716	0.264508401	2.997231757
グループ内	6582801.794	5987	1099.515917			
合計	6585726.897	5989				

検証結果 (上記の分散分析表から)

- ① P 値 (0.2645) > 棄却域の確率 (有意水準 : 0.05) : 棄却できない
  - ② F 境界値 (2.9972...) > 観測された分散比 (1.3301...) : 棄却できない
- 帰無仮説「2008年前期、2009年前期、2010年前期の3回のテストの平均点には差がない」を棄却できない。
- 2008年前期、2009年前期、2010年前期の3回のテストのTTLの平均点の間には、統計的な有意差が無いと言える

2008年、2009年、2010年のそれぞれ前期のG-TELP結果についての分散分析の結果が上の表4である。これによると、結論としては 過去3年間については、鹿児島大学に入学してくる学生の英語力レベルは全体的にはほぼ同一であるということがわかる。

#### 5. 上位、中位、下位100名を抽出しての分散分析結果

表 5

分散分析：一元配置

■上位

TTL

概要

グループ	標本数	合計	平均	分散
2008	100	22981	229.81	132.8827273
2009	100	23068	230.68	144.0379798
2010	100	23018	230.18	138.5531313

## 分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P - 値	F 境界値
グループ間	38.126667	2	19.06333333	0.137650063	0.871459135	3.026153369
グループ内	41131.91	297	138.4912795			
合計	41170.037	299				

- P値>0.05 : 棄却できない
  - F境界値>観測された分散比 : 棄却できない
- ⇒有意差は無い

## GRM

## 概要

グループ	標本数	合計	平均	分散
2008	100	8816	88.16	39.65090909
2009	100	8822	88.22	49.68848485
2010	100	8621	86.21	56.28878788

## 分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P - 値	F 境界値
グループ間	261.54	2	130.77	2.693915389	0.069268017	3.026153369
グループ内	14417.19	297	48.54272727			
合計	14678.73	299				

- P値>0.05 : 棄却できない
  - F境界値>観測された分散比 : 棄却できない
- ⇒有意差は無い

## LST

## 概要

グループ	標本数	合計	平均	分散
2008	100	5781	57.81	73.08474747
2009	100	5758	57.58	84.67030303
2010	100	5884	58.84	100.1559596

## 分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P - 値	F 境界値
グループ間	90.046667	2	45.02333333	0.52370777	0.592866241	3.026153369
グループ内	25533.19	297	85.9703367			
合計	25623.237	299				

- P値>0.05 : 棄却できない
  - F境界値>観測された分散比 : 棄却できない
- ⇒有意差は無い

## 研究論文

### RDG

#### 概要

グループ	標本数	合計	平均	分散
2008	100	8384	83.84	53.79232323
2009	100	8488	84.88	65.98545455
2010	100	8513	85.13	52.61929293

#### 分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P - 値	F 境界値
グループ間	93.606667	2	46.80333333	0.814456994	0.443866402	3.026153369
グループ内	17067.31	297	57.46569024			
合計	17160.917	299				

- P値 > 0.05 : 棄却できない
  - F境界値 > 観測された分散比 : 棄却できない
- ⇒有意差は無い

分散分析：一元配置

### ■中位

### TTL

#### 概要

グループ	標本数	合計	平均	分散
2008	100	15876	158.76	1.557979798
2009	100	16038	160.38	1.530909091
2010	100	15904	159.04	0.584242424

#### 分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P - 値	F 境界値
グループ間	149.94667	2	74.97333333	61.23385766	5.41501E-23	3.026153369
グループ内	363.64	297	1.224377104			
合計	513.58667	299				

- P値 < 0.05 : 棄却
  - F境界値 < 観測された分散比 : 棄却
- ⇒有意差がある

### GRM

#### 概要

グループ	標本数	合計	平均	分散
2008	100	6127	61.27	113.7950505
2009	100	6079	60.79	111.2584848
2010	100	5943	59.43	71.27787879

## 分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P - 値	F 境界値
グループ間	182.18667	2	91.09333333	0.922210697	0.398774592	3.026153369
グループ内	29336.81	297	98.77713805			
合計	29518.997	299				

- P値 > 0.05 : 棄却できない
  - F境界値 > 観測された分散比 : 棄却できない
- ⇒有意差は無い

## LST

## 概要

グループ	標本数	合計	平均	分散
2008	100	3984	39.84	81.02464646
2009	100	4321	43.21	66.67262626
2010	100	3989	39.89	59.04838384

## 分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P - 値	F 境界値
グループ間	746.06	2	373.03	5.412882759	0.004909587	3.026153369
グループ内	20467.82	297	68.91521886			
合計	21213.88	299				

- P値 < 0.05 : 棄却
  - F境界値 < 観測された分散比 : 棄却
- ⇒有意差がある

## RDG

## 概要

グループ	標本数	合計	平均	分散
2008	100	5765	57.65	92.83585859
2009	100	5638	56.38	97.12686869
2010	100	5972	59.72	62.1430303

## 分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P - 値	F 境界値
グループ間	568.44667	2	284.2233333	3.382191697	0.035286642	3.026153369
グループ内	24958.47	297	84.03525253			
合計	25526.917	299				

- P値 < 0.05 : 棄却
  - F境界値 < 観測された分散比 : 棄却
- ⇒有意差がある

分散分析：一元配置

## ■下位

### TTL

#### 概要

グループ	標本数	合計	平均	分散
2008	100	9393	93.93	115.6617172
2009	100	9566	95.66	88.87313131
2010	100	9301	93.01	121.0605051

#### 分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P - 値	F 境界値
グループ間	362.06	2	181.03	1.667990633	0.190387742	3.026153369
グループ内	32233.94	297	108.5317845			
合計	32596	299				

● P値 > 0.05 : 棄却できない

● F境界値 > 観測された分散比 : 棄却できない

⇒有意差は無い

### GRM

#### 概要

グループ	標本数	合計	平均	分散
2008	100	3394	33.94	83.99636364
2009	100	3421	34.21	80.22818182
2010	100	3397	33.97	89.28191919

#### 分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P - 値	F 境界値
グループ間	4.38	2	2.19	0.025916499	0.974418654	3.026153369
グループ内	25097.14	297	84.50215488			
合計	25101.52	299				

● P値 > 0.05 : 棄却できない

● F境界値 > 観測された分散比 : 棄却できない

⇒有意差は無い

### LST

#### 概要

グループ	標本数	合計	平均	分散
2008	100	2818	28.18	55.17939394
2009	100	2896	28.96	64.50343434
2010	100	2775	27.75	67.11868687

#### 分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P - 値	F 境界値
グループ間	75.246667	2	37.62333333	0.604224221	0.5471686	3.026153369
グループ内	18493.35	297	62.26717172			
合計	18568.597	299				



- P値>0.05：棄却できない
  - F境界値>観測された分散比：棄却できない
- ⇒有意差は無い

## RDG

## 概要

グループ	標本数	合計	平均	分散
2008	100	3181	31.81	100.6807071
2009	100	3249	32.49	79.72717172
2010	100	3129	31.29	73.70292929

## 分散分析表

変動要因	変動	自由度	分散	観測された分散比	P - 値	F 境界値
グループ間	72.426667	2	36.21333333	0.427530024	0.652518508	3.026153369
グループ内	25156.97	297	84.70360269			
合計	25229.397	299				

- P値>0.05：棄却できない
  - F境界値>観測された分散比：棄却できない
- ⇒有意差は無い

上の表5は さらに細かく、上位、中位、下位それぞれ100名を抽出して分散分析を行なった結果である。それによると、中位レベルで若干有意差が出ているものの、上位、下位では有意差は見られないという点に注目する必要がある。これが意味するところは、よく漠然とした印象で「入学者の学力レベルが年々下がってきて、特に下位レベルが増えている」という風に語られやすいが、英語に関する限りは、実態は必ずしもそうではない、ということである。総体的には、鹿児島大学に入学してくる学生レベルは、上位、中位、下位ともに、ここ3年間で見る限りほぼ横ばいであるといえる。特に下位レベルが増加しているということはG-TELP結果を見る限り、言えないということになる。

## 6. 学部別2008-2010年度の3カ年の前期成績推移

表6

学部	得点差 (2009年 - 2008年)								得点差 (2010年 - 2009年)							
	GRM	有意差	LST	有意差	RDG	有意差	TTL	有意差	GRM	有意差	LST	有意差	RDG	有意差	TTL	有意差
医学部 医	1.5	なし	3.3	なし	0.3	なし	5.1	なし	-2.2	なし	-1.6	なし	0.7	なし	-3.1	なし
医学部 保健	-0.6	なし	-0.0	なし	2.9	なし	2.3	なし	1.4	なし	0.0	なし	-0.3	なし	1.0	なし
医学部 全体	0.5	なし	1.5	なし	2.1	なし	4.1	なし	0.6	なし	-0.2	なし	1.0	なし	1.4	なし
水産学部	-1.9	なし	1.1	なし	-1.6	なし	-2.4	なし	2.0	なし	0.7	なし	3.4	なし	6.0	あり
歯学部	-3.3	なし	-2.1	なし	-2.2	なし	-7.6	なし	-9.9	あり	2.1	なし	-5.6	あり	-13.4	あり
農学部	0.7	なし	-0.2	なし	-0.9	なし	-0.4	なし	-0.0	なし	1.6	なし	1.7	なし	3.3	なし
教育学部	0.9	なし	0.6	なし	1.6	なし	3.1	なし	-1.2	なし	-1.6	なし	-0.5	なし	-3.4	なし
法文学部	-0.3	なし	0.5	なし	0.9	なし	1.1	なし	-0.9	なし	-0.8	なし	-0.5	なし	-2.2	なし
理学部	-3.2	なし	1.6	なし	1.6	なし	-0.0	なし	1.7	なし	-0.9	なし	-1.0	なし	-0.3	なし
工学部	2.1	あり	0.2	なし	0.1	なし	2.4	なし	-3	なし	0.2	なし	-0.5	なし	-3.4	なし
全体	0.3	なし	0.6	なし	0.7	なし	1.7	なし	-1	なし	-0.2	なし	-0.1	なし	-1.2	なし

学部	得点差 (2010年 - 2008年)							
	GRM	有意差	LST	有意差	RDG	有意差	TTL	有意差
医学部 医	-0.7	なし	1.7	なし	1.0	なし	2.0	なし
医学部 保健	0.8	なし	0.0	なし	2.5	なし	3.3	なし
医学部 全体	1.1	なし	1.3	なし	3.1	なし	5.5	なし
水産学部	0.0	なし	1.8	なし	1.8	なし	3.6	なし
歯学部	-13.2	あり	0.0	なし	-7.8	あり	-21.0	あり
農学部	0.7	なし	1.4	なし	0.8	なし	2.9	なし
教育学部	-0.4	なし	-1.0	なし	1.0	なし	-0.3	なし
法文学部	-1.2	なし	-0.3	なし	0.4	なし	-1.1	なし
理学部	-1.5	なし	0.7	なし	0.5	なし	-0.3	なし
工学部	-0.9	なし	0.3	なし	-0.4	なし	-1.0	なし
全体	-0.7	なし	0.4	なし	0.7	なし	0.5	なし

表6は 学部別（一部学科別）の前期成績の推移を前後する2ヵ年比較（2008年度と2009年度、2009年度と2010年度、2008年度と2010年度）で見たものである。2008年度と2009年度比較によれば、全学部で統計上の有意差は無しという結果が出ている。これは2008年度生と2009年度生はどの学部もほぼ同じレベルの学生が入学してきている、ということを示唆している。

2009年度と2010年度比較によれば若干の変動があり、水産学部でプラス6.0ポイントとなって有意差があり、歯学部では逆にマイナス13.4ポイントで有意差が出ている。これは、統計的な見地から言えば、水産学部入学生は2009年度よりも2010年度の方が若干英語学力レベルが高く、歯学部入学生は逆に、2009年度よりも2010年度の方が若干英語学力レベルが低くなっているということを表しているとも考えられる。（ただし、すでに述べたように、前期のG-TELP実施は前期10～11週目あたりであるため、前期の授業結果が考慮すべきファクターとして入り込んできていることも考えられ、4月時点での入学時の学力がそのまま反映されているとは一概にいえぬ面もある。）

最後に2008年度と2010年度比較では、唯一歯学部がマイナス21.0ポイントという有意差が出ている。他学部では有意差が見られないことを考えると、歯学部入学生に関しては、2008年度と比較して2010年度は入学生の英語学力レベルが下がったと見る事が可能である。

## 7. 09年前期—10年前期までの初の3期にまたがる成績推移調査結果について

表7

セクション	2009年前期	2009年後期	2010年前期	2009前期 - 2009後期		2009後期 - 2010前期	
				差	有意差	差	有意差
T T L	152.4	164.8	166.8	12.4	あり	1.9	あり
GRM	58.0	65.8	62.9	7.8	あり	-2.9	あり
L S T	41.0	46.0	49.8	5.0	あり	3.8	あり
R D G	53.4	53.1	54.1	-0.4	なし	1.0	あり
	英語コア (週2)	英語コア (週2)	オープン (週1)	英語コア (週2)		オープン (週1)	

### t - 検定結果

帰無仮説：テスト間の平均点の差には有意差がない

帰無仮説を採択 ⇒ 有意差がない

帰無仮説を棄却 ⇒ 有意差がないとはいえない ⇒ 有意差がある

t-検定：一対の標本による平均の検定ツール  
2009年前期-2009年後期

	TTL (G+L+R)	TTL (G+L+R)
平均	152.3856549	164.8347193
分散	854.3120937	1022.302519
観測数	962	962
ピアソン相関	0.640732338	
仮説平均との差異	0	
自由度	961	
t	-14.8176175	
P (T<=t) 片側	3.40962E-45	
t 境界値 片側	1.646440774	
P (T<=t) 両側	6.81924E-45	
t 境界値 両側	1.962435544	

検定結果  $P (T \leq t) < 0.05 \Rightarrow$  よって、仮説は棄却  
 $\Rightarrow$  有意差がある

	GRM	GRM
平均	57.9989605	65.77650728
分散	249.6472414	276.6378242
観測数	962	962
ピアソン相関	0.495308512	
仮説平均との差異	0	
自由度	961	
t	-14.7919828	
P (T<=t) 片側	4.65075E-45	
t 境界値 片側	1.646440774	
P (T<=t) 両側	9.3015E-45	
t 境界値 両側	1.962435544	

検定結果  $P (T \leq t) < 0.05 \Rightarrow$  よって、仮説は棄却  
 $\Rightarrow$  有意差がある

	LST	LST
平均	40.97505198	46.00727651
分散	102.2283051	126.5400094
観測数	962	962
ピアソン相関	0.187713132	
仮説平均との差異	0	
自由度	961	
t	-11.4422362	
P (T<=t) 片側	8.19895E-29	
t 境界値 片側	1.646440774	
P (T<=t) 両側	1.63979E-28	
t 境界値 両側	1.962435544	

検定結果  $P (T \leq t) < 0.05 \Rightarrow$  よって、仮説は棄却  
 $\Rightarrow$  有意差がある

t-検定：一対の標本による平均の検定ツール  
2009年後期-2010年前期

	TTL (G+L+R)	TTL (G+L+R)
平均	164.8347193	166.7598753
分散	1022.302519	1413.552062
観測数	962	962
ピアソン相関	0.702324035	
仮説平均との差異	0	
自由度	961	
t	-2.18425704	
P (T<=t) 片側	0.01459222	
t 境界値 片側	1.646440774	
P (T<=t) 両側	0.029184441	
t 境界値 両側	1.962435544	

検定結果  $P (T \leq t) < 0.05 \Rightarrow$  よって、仮説は棄却  
 $\Rightarrow$  有意差がある

	GRM	GRM
平均	65.77650728	62.8970894
分散	276.6378242	259.5076086
観測数	962	962
ピアソン相関	0.559396149	
仮説平均との差異	0	
自由度	961	
t	5.80879531	
P (T<=t) 片側	4.2745E-09	
t 境界値 片側	1.646440774	
P (T<=t) 両側	8.549E-09	
t 境界値 両側	1.962435544	

検定結果  $P (T \leq t) < 0.05 \Rightarrow$  よって、仮説は棄却  
 $\Rightarrow$  有意差がある

	LST	LST
平均	46.00727651	49.8035343
分散	126.5400094	204.3619854
観測数	962	962
ピアソン相関	0.394744865	
仮説平均との差異	0	
自由度	961	
t	-8.24494754	
P (T<=t) 片側	2.69476E-16	
t 境界値 片側	1.646440774	
P (T<=t) 両側	5.38952E-16	
t 境界値 両側	1.962435544	

検定結果  $P (T \leq t) < 0.05 \Rightarrow$  よって、仮説は棄却  
 $\Rightarrow$  有意差がある

	RDG	RDG		RDG	RDG
平均	53.41164241	53.05093555	平均	53.05093555	54.05925156
分散	203.5723097	195.3428763	分散	195.3428763	270.2868082
観測数	962	962	観測数	962	962
ピアソン相関	0.55131474		ピアソン相関	0.53569936	
仮説平均との差異	0		仮説平均との差異	0	
自由度	961		自由度	961	
t	0.836130332		t	-2.11116456	
P (T<=t) 片側	0.201644717		P (T<=t) 片側	0.017507945	
t 境界値 片側	1.646440774		t 境界値 片側	1.646440774	
P (T<=t) 両側	0.403289433		P (T<=t) 両側	0.035015891	
t 境界値 両側	1.962435544		t 境界値 両側	1.962435544	
検定結果 P (T<=t) > 0.05 ⇒ よって、仮説は採択 ⇒ 有意差はない			検定結果 P (T<=t) < 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 ⇒ 有意差がある		

2010年度は、2年次で5学部の学生が必修科目となっている前期の英語オープンについてもG-TELP受験を義務付けている。これによって同一学生を、1年次前期・後期、2年次前期の3期にわたって追跡調査することが可能となった。今回対象となった学生は、教育学部、水産学部、農学部、理学部、工学部の5学部962名であった。

この調査結果を示したのが上の表7である。これによると、全体で、2009年前期152.4ポイント、2009年後期164.8ポイント、2010年前期166.8ポイント、で、それぞれ2008年前期から後期にかけて、また、2009年後期から2010年前期にかけて統計的に有意差のある得点の伸びを示している。

ここで注目すべきは2009年前期から後期にかけてはコア英語週2科目の体制であり、2009年後期から2010年前期にかけては英語オープン週1科目の体制であるという点。得点の伸びは、2009年前期－後期に比べて、2009年後期－2010年前期は鈍化しているが、週1回授業の体制化でも有意的な伸びが出ているということは、週2コマ体制化もしくは週1コマ体制にすべきかなどの、今後考えられるカリキュラム改編の方向性に関して一つの参考資料となりうると考えられる。

セクションごとに見た場合、今後の懸案事項として考慮しなければならないのはGRM（文法）部門で2009年後期から2009年前期にかけてマイナス2.9ポイントで有意差あり、という結果が出ている点である。これは使用されたFormの違いなどが得点差になって現れている可能性もあるので、今後の検討が必要な課題である。

## 8. 英語オープンの通常クラスとe-learningクラスとの比較

表8

### ■経年比較（素点ベース）

・08年後期（315）→09年前期（314）

セクション	通常クラス（93名）			e-learningクラス（88名）		
	08後期	09前期	有意差	08後期	09前期	有意差
T T L	159	168.8	あり	165.8	178.8	あり
G R M	62.1	65.0	なし	64.1	69.5	あり
L S T	46.1	40.8	あり	48.0	43.3	あり
R D G	50.8	63.0	あり	53.6	65.9	あり

09年後期（315）→10年前期（319）

セクション	通常クラス（745名）			e-learningクラス（212名）		
	09後期	10前期	有意差	09後期	10前期	有意差
T T L	161.9	163.8	あり	174.6	176.8	なし
G R M	64.3	61.6	あり	70.8	67.6	あり
L S T	45.4	48.9	あり	48.0	52.8	あり
R D G	52.2	53.4	あり	55.8	56.4	なし

■伸びの比較

08年後期 (315) →09年前期 (314)

セクション	08後期 - 09年前期の伸び			
	通常	e-learning	差(素点)	有意差
T T L	9.9	13.0	3.1	なし
G R M	2.9	5.4	2.4	なし
L S T	-5.2	-4.7	0.5	なし
R D G	12.2	12.4	0.1	なし

09年後期 (315) →10年前期 (319)

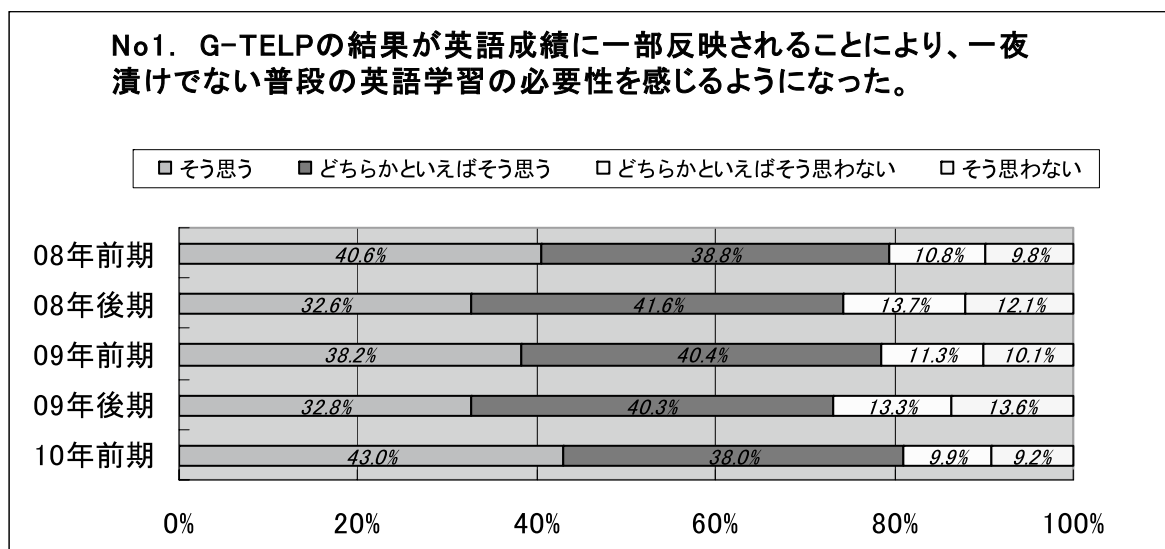
セクション	09後期 - 10年前期の伸び			
	通常	e-learning	差(素点)	有意差
T T L	2.0	2.1	0.2	なし
G R M	-2.8	-3.3	-0.5	なし
L S T	3.5	4.8	1.2	なし
R D G	1.2	0.6	-0.5	なし

2年生前期の英語オープンクラスではパイロットスタデイとして、通常授業クラスとe-learningクラスの2種類の授業形態でG-TELPの伸びの比較を2008年度から行なっている。その結果を表したのが表8である。2008-2009年を見てみると、通常クラスでは2008年後期にコア英語でG-TELPを受けた後、2009年前期に英語オープンでG-TELPを受けた学生がトータルで9.9ポイント伸びているのに対し、e-learningクラスでは同時期比較で13.0ポイントの伸びで、いずれも統計的に有意差のある伸びを示している。2009年-2010年の場合は、通常クラスではトータルで2.0ポイント伸びているのに対し、e-learningクラスでは同時期比較で2.1ポイントの伸びで、統計的には通常クラスが有意差のある伸びであるのに対し、e-learningクラスでは有意差はないという統計結果となっている。

2008-2009年に対して、2009-2010年はe-learningクラスでの伸びが鈍化した原因については今後検討が必要であるが、考えられる理由の一つは使用した試験formの違いである。2008年後期、2009年後期のコア英語受講時にはどちらも同じForm315を使用したのに対し、2009年前期の英語オープン受講時にはForm314、2010年前期の英語オープン受講時にはForm319を使用している。この使用Formの違いが、学力の伸びの相違に何らかの反映をしている可能性は考えられる。

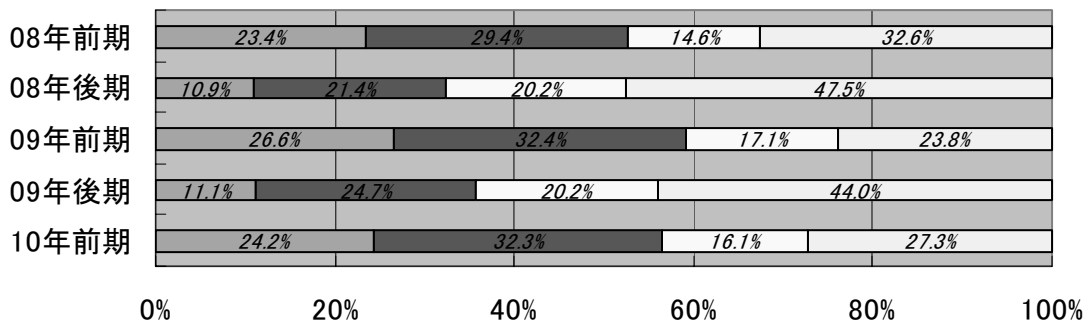
9. 学生アンケート結果の5期通算状況

表9



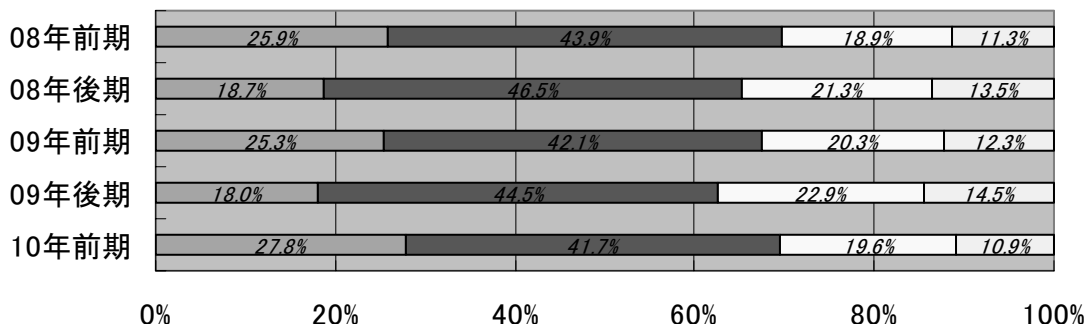
**No.2 Middle上でG-TELP模擬試験にトライしたり、別のG-TELP問題集をするなど、何らかの事前学習活動を行った。**

□ そう思う   ■ どちらかといえばそう思う   □ どちらかといえばそう思わない   □ そう思わない



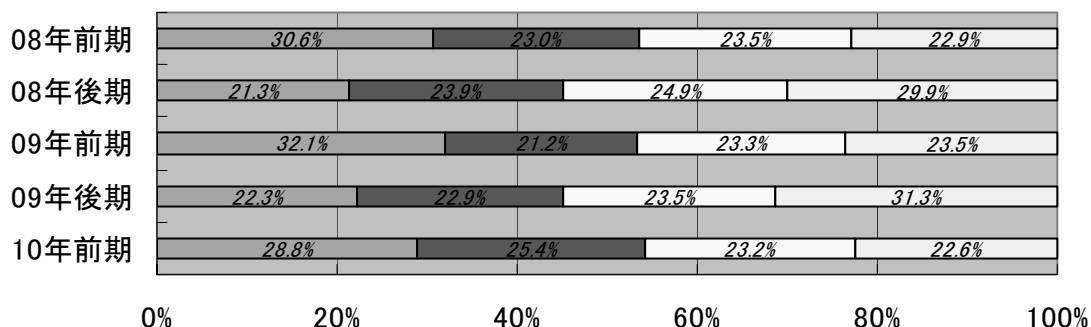
**No.3 G-TELPのような外部試験を受験することにより、英語学習に対する学習意欲や目的意義が高まる。**

□ そう思う   ■ どちらかといえばそう思う   □ どちらかといえばそう思わない   □ そう思わない



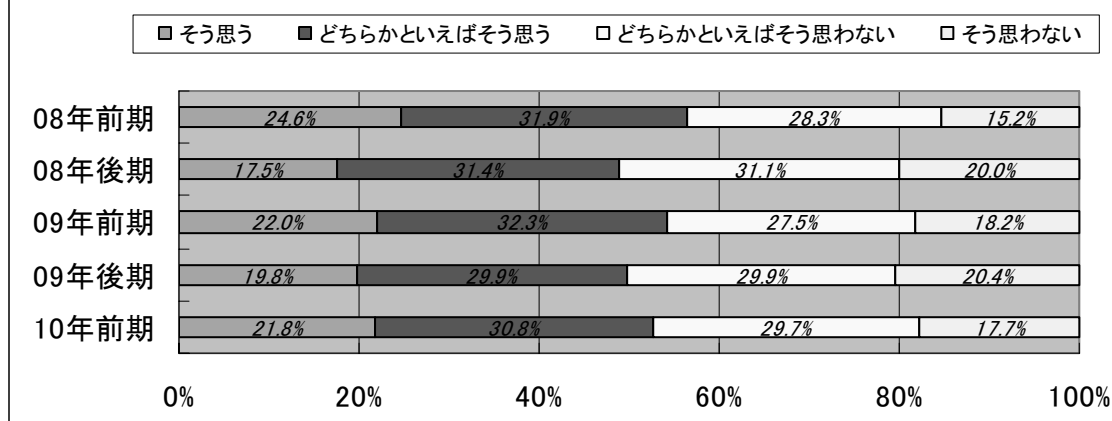
**No.4 G-TELP以外の、TOEIC、TOEFL、英検等の外部試験について、1-2年次(低学年)に受験する計画でいる。**

□ そう思う   ■ どちらかといえばそう思う   □ どちらかといえばそう思わない   □ そう思わない





### No.5 現在履修している英語科目に対して、ほぼ毎週(毎日)、授業時間外学習(自宅学習等)を行っている。



上の表9は2008年前期から2010年前期までの5期にわたって取ってきた学生アンケートの結果を示している。

質問項目は下記の5項目である。

- No1：G-TELPの結果が英語の成績に一部反映されることにより、一夜漬けでない普段の英語学習の必要性を感じるようになった。
- No2：Moddle上でG-TELP模擬試験にトライしたり、別のG-TELP問題集をするなど、何らかの事前学習活動を行った。
- No3：G-TELPのような外部試験を受験することにより、英語学習に対する学習意欲や目的意識が高まる。
- No4：G-TELP以外の、TOEIC、TOEFL、英検等の外部試験について、1－2年次(低学年)に受験する計画でいる。
- No5：現在履修している英語科目に対して、ほぼ毎週(毎回)、授業時間外学習(自宅学習等)を行っている。

この結果によると一つの大きな傾向が見て取れる。それは全5項目ともに、前期に比べて後期が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」のパーセンテージが下がる一方、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」が逆に比率が上昇しているという点である。この原因についてはいくつか推論できるが、ひとつには、入学時の緊張が後期になってやや緩み、それが数値として現れている可能性がある。この比率の変動については今後更なる調査研究が必要であると考えている。

結語：これまでの通算5期にわたるG-TELP結果から様々の事柄が見えてくるが、特に、今後さらにデータを蓄積して結果の推移を注意深く見る必要があるのは、週2回授業の1年生コア英語受講者のG-TELP成績推移と、週1回授業の2年生英語オープン受講者のG-TELP成績推移のあり方である。上記の報告で示したように、2009年から2010年にかけては、ともに有意差のある学力の伸びがあった。今後も同様の結果が得られるのかどうかについて慎重に見ていく必要があると思われる。その大きな理由の一つは、昨今の財政の緊縮化に伴い、英語教育カリキュラムの再検討に向けて、全体の授業コマ数をどのようにするのか等の大枠での議論が必然的に活発化していくことが今後予想されるからである。

以上の点を含めて、外国語教育推進部としては英語教育改革に向けて、今後もさらに客観式の共通実力テストであるG-TELP等を活用した学力状況の可視化を積極的に推進していく考えである。